



Vol.22
October 2015

文化・芸術研究センター
ニュースレター

CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~4
公開講座紹介	5
活動紹介	6~7
2014年度研究事業等一覧	8~11
インフォメーション	12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



学長

熊倉 功夫

Isao Kumakura

共同研究のすすめ

静岡文化芸術大学の研究体制をどのように整備するか。大学の学術的水準を高めるために重要な課題である。研究費の額は決して多くはないが、個人研究費、学長特別研究費をはじめとする各種研究費を考えると、人文社会系としてはまずまずであろう。それに対する研究成果は如何。教員一人一人の研究成果を見ると、すぐれた研究業績をあげている先生も少なくないが、しかし、今の研究状況に対して、学長としての私は、必ずしも満足していない。

大学教員たるもの、教育、研究、業務（社会貢献を含めて）の三つの仕事があるのは当然で、自らその間のバランスをとらなければならない。教員の多くの方が教育に熱心でよい成果をあげていることは、誇るべきわが大学の長所であり、本学の学生も満足しているだろう。業務も積極的に参加される先生がほとんどで、教育研究を阻害する雑務とこれを嫌悪する教員が少ないのは、とても嬉しいことだ。もちろんその事務量を減じてゆく努力はいつも必要である。

この6年間を本学で過してみても、教育や業務の面に比べると研究面では、全体として不十分であると感じた。第一に成果の発表が足りない。数量でいえば、1年に学術論文1本を発表するのは大学教員としての責務であると考えている。少なくとも10年に1冊は成果を世に問うのが人文社会系の研究者のあるべき姿ではないか。仮に2・3年に1本であっても、それなりに重厚な論文であれば許されよう。はっきり言って、5年以上論文らしい論文が1本もないのは、大学教員として如何なものか。もちろん書けないということには様ざまな事情もあるだろうが、それでも1本も論文が書けないということであれば、大学教員としての資質があるのか、自らを疑ってみる厳しさが必要ではないか。

大学は、己の研究室に入ってしまうと、他から全く干渉されない特殊な環境にある。この中で無関心が蔓延したら、最悪の

状況となる。無関心の壁を取除いていかに互いに切磋琢磨できる環境を作るか、真剣に考えるべき時がきている。そのための一つの方策として、共同研究を進めては如何であろう。

いまさら共同研究など陳腐な、といわれそうだが、現代でも有効な研究方法であると思う。自分がそれで育てられた、ということはあるが、関西風の共同研究の場にほうりこまれた時は、何もかもが清新に感じられた。一番新鮮だったのは、全く専門領域の違う人びとが集まってカンカンガクガクの議論をするから面白い。別世界の話だから知らないことだらけである。その時、「それは何ですか」と知らないことを尋ねるのは恥しいことではない。梅棹忠夫氏は言い放った。「知らない方が悪いのじゃない。知らせない方が悪い」。鶴見俊輔氏はエッセイに書いているが、彼はメダカの学校が好きだという。「誰が生徒か先生か」分からない勉強会が共同研究である。

共同研究を進めるための体制を作る必要がある。そのための文化・芸術研究センターの改組ができないだろうか。現在の重点領域研究は、大事なテーマではあるけれども、未来永劫続けていくというものではない。3年に一度なり5年に一度なり、研究テーマ、体制を見直した方がよい。文芸センターの本来の目的である両学部の有機的連携と研究情報の発信・活用という面が弱体化して、地域貢献、連携センター化している。原点に戻って、全教員が共同研究に参加する場とできないか。

共同研究参加を義務化することは、直ちにはむずかしいが、学長特別研究経費等は、共同研究費なのだから、一つにまとめて目的をはっきりさせ、何らかのかたちで全教員が加わるかたちとすればよい。今の特別研究は個人的な興味のもとに使われているものもあり、きちんとした（外部に発表できるような）報告書が必ずしもまとめられていない。

共同研究である以上、定期的にメンバーが集まって発表と討論が行なわれ、その成果が論文集として世に問われなければならない。そのためには単年度で終らぬこともあろう。2~3年かかってまとめられる共同研究があってもよい。外部からメンバーを集めてもよい。共同研究を目的として設置される国立の研究所を見ても、最近は毎週研究会を開いている所は少なく、月に一度とか、年間数回ミニシンポジウムを開くような横着な研究状況であることを考えると、本学のように教育主体の大学では頻りに研究会を開くのはむずかしい。それでも年間10回以上、議論する機会がなければ、成果はあがらない。また研究会は誰か責任者が必要で、その人の負担を少しでも軽くするために、場合によっては1コマ分くらい非常勤講師を充当して共同研究に力を割いてもらうことも一案である。いずれにしても共同研究を負担と考えるのではなく、学問的な刺激を受ける場であり、楽しい耳学問の場なのだから、一つやってみようじゃないかという雰囲気を感じて期待したい。

全国アートマネジメント会議を通じた プロフェッショナルのためのネットワーク形成支援

片山泰輔（文化政策研究科長）

平成16年設立の静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科は、プロフェッショナルの養成を目指した実践的な大学院であり、特にアートマネジメント分野においては、日本の大学院として初めてAAAE（Association of Arts Administration Educators）の正会員となり、国際的基準にそった教育プログラムを展開してきている。修了生は、文化施設、行政、民間非営利団体、文化・情報産業等の第一線で活躍するとともに、学術的な発信においても近年、目覚ましい成果をあげつつある。しかしながら、開設以来、本学における人的・財政的制約から、実務家養成を掲げる大学院でありながら、平日昼間のみで開催形態となっており、本格的な社会人受け入れ体制を整えられずに10年以上が経過してきた。同じ静岡県立の静岡県立大学大学院経営情報イノベーション研究科が夜間・土曜開講、サテライトキャンパスを実施しているのとは対照的な状況にある。

こうした中、静岡文化芸術大学では、平成25年度より文化庁の大学を活用した文化芸術推進事業に採択され、3年間で総額7千万円を超える補助金を得たことにより、「文化施設・実演芸術団体のためのアートマネジメント実践ゼミナール～中長期の計画策定を通じたアートマネジメント人材育成～（以降「実践ゼミ」）」を開講してきている。平成25年度末に全国7都市で開講した講義形式の「事前講座」を受講した約200名の実務家に呼びかけて受講者を募り、平成26年度からは本格的なゼミ形式の講座「実践ゼミ」を、札幌、東京、浜松、大阪、奈良、岡山、福岡の全国7都市で展開してきている。

実践ゼミは、各団体から数名が受講し、グループで課題に取り組む団体受講の形態をとっている。文化施設等は慢性的な人手不足に悩まされており、個人単位での受講だと業務多忙の中、2年間にわたるハードな講座の受講を継続することが困難なケースが生じると予想されたためである。公募の結果、全国19団体に所属する約80名が受講する大規模な講座となったが、受講団体は公立の劇場・音楽堂、民間劇場、博物館から、オーケストラや劇団まで多分野にわたるとともに、法人形態も公益・一般財団法人、公益・一般社団法人、特定非営利活動法人、株式会社、有限会社と、芸術文化の担い手として想定されるほとんどすべての法人形態が集まる多様なものとなった。

全国7都市で各4回ずつ開講されたゼミでは、芸術文化の公共性、組織のミッション・ビジョン、組織と人材、財務、マーケティング、ファンディング等、本学大学院において展開されているアートマネジメントカリキュラムの基礎的な事項についての講義とともに、課題のワークシートが出題される。受講者はこれを各団体に持ち帰り、それぞれの団体の中に計画策定委員会を開催して、課題の検討を行い、次回の実践ゼミで発表して議論を行うというサイクルを4回繰り返した。

このような受講者が一堂に会して約1年間にわたる取り組みの成果を発表しディスカッションするために成果発表会が、平成26年度は平成27年2月28日（土）・3月1日（日）にかけて本学で行われた第1回全国アートマネジメント会議である。当日は業務の関係で都合がつかなかった1団体を除く18団体が、

北海道から沖縄まで、文字通り全国から集まり、取り組みの成果をお互いに披露した。また当会議は、日曜日午前中の分科会を除いて、一般公開としたため、受講者以外にも実務家や研究者等も全国から多数集まり、総勢百数十名のイベントとなった。

初日の土曜日は、本学講堂において、1団体あたり15分ずつ18団体が、各団体の現状分析と今後の課題についての発表を行った。当講座は2年間のコースであり、最終年度には実際に中長期の計画策定を行うことになっているので、その準備として初年度はそれぞれの団体の現状分析をアートマネジメントの体系における様々な視点から行ってきた。財務面や人材面に課題を抱える団体、マーケティングに課題を感じている団体、あるいは自らの団体が果たすべき使命について模索している団体等、現状分析によって様々な課題が明らかになったことが披露された。2日目の午前中は、受講者をランダムに4グループに分け、グループごとに少人数の場で意見交換を行う分科会を行った。午後は、再び講堂に集まり、前日の発表会の講評を兼ねたシンポジウムを行い総括した。

最後に、受講者アンケートの結果によって、全国アートマネジメント会議を振り返ってみたい。まずは、「成果発表の準備が負担であった」と回答した者が84%を占めており、年度末の忙しい時期に発表会を行ったことへの負担は大きかったものと推察される。しかしその一方で、「発表準備を通じて新たな発見があった」（72%）、「発表準備を通じて理解が深められた」（87.5%）という結果となっており、対外発信による学修効果には大きなものがあることが伺える。また、他団体の発表を聴くことで、「新たな知識が得られた」（84.6%）、「視野が広がった」（80.8%）者が多数を占めた。さらに、懇親会や分科会等で直接他団体の受講者と交流する機会が持てたことに対しては、「交流によって得たものがあった」（84.6%）、「今後のネットワーク形成につながった」（61.5%）という回答が得られており、全国の受講者が一堂に会することの意義があらためて確認できた。

文化庁補助事業の実践ゼミは平成27年度が最終年度となる。本年度末に開催予定の第2回全国アートマネジメント会議では、2年間の最終成果をお互い発表しあい、昨年度以上に有意義な交流が図られることを期待している。本学では、3年間の文化庁補助事業の実績を継承し、平成28年度からは「SUACエグゼクティブ・プログラム（SUAC-EP）：アートマネジメント&芸術文化政策コース」をスタートさせる予定である。大学院修士課程に準じた1年コースの実務家向けの教育プログラムで、修了者には正式な修了証も発行される。平成28年度以降の全国アートマネジメント会議は、SUAC-EPの成果発表会とともに、実践ゼミ修了生の対外発信・交流の場として継続開催される予定である。実践ゼミ、そして新たにスタートするSUAC-EP修了生は、SUACをハブとした同じ修了生ネットワークに参加し、互いに刺激を受けながら切磋琢磨し、我が国の芸術文化の発展に大きく貢献していくことが期待される。

活動紹介

「食文化と電気釜」

伊豆裕一 (デザイン学科長)

1955年、東京芝浦電気（現株式会社東芝）より発売された自動式電気釜ER-5は、米と水を入れてスイッチを入れればおいしいご飯が炊けるという、今ではごく当たり前となったことを実現した商品でした。

白いボディとアルミニウムの蓋で表現された、簡素で「釜」というイメージをくずさないER-5のデザインは、日本の工業製品を代表するデザインとして広く知られています。当時、デザインを担当した岩田義治は「いかにも高級でおいしく炊けそうなイメージを、ちょっとよい磁器の茶碗にみられるゆるやかで張りのあるカーブと、ふっくらとした鋳物の伝統的な釜をイメージしながら、清潔感と落ち着きをシンプルに表現した」。また「真っ白なボディと光輝アルミのふたで、家庭に持ち帰ったときに、明日からの文化生活を約束するものとしてデザインした」とデザインのコンセプトを語っています。

日本の伝統的な羽釜のイメージを陶磁器のような白い外観に表現したデザインは、科学技術が提供する新しい時代を感じさせるとともに、モダンなライフスタイルへのあこがれを表現したものであったと言えます。ER-5の発売から60年、電気釜（炊飯器などの名称も含む）のデザインは、技術の進化に加え、住環境やライフスタイルの変化にも影響を受け進化してきました。

電気釜の輸出は1959年に香港向けに開始され、韓国には、1965年にGoldstar（現 LG）を通じて最初に導入され、1972年には韓日電機株式会社が日本の三洋社との技術提携を結び生産を開始しました。

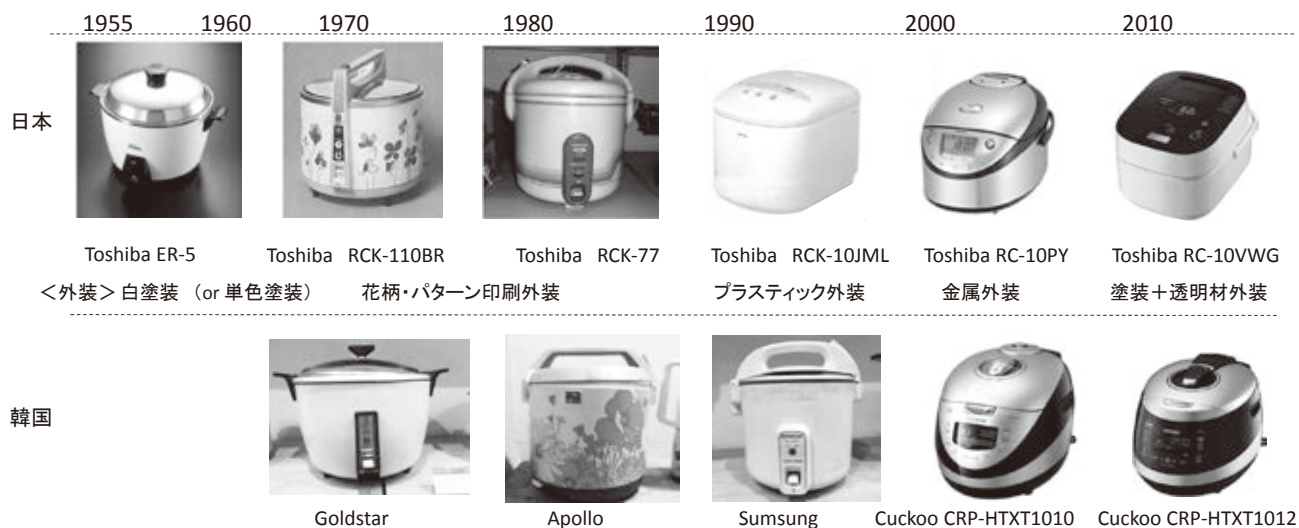
1980年代まで、韓国内における日本製電気釜の人気は高く、日本旅行の土産として空港の売店での販売が多く行われました。ところが1990年代の半ばになると、韓国内の市場は韓国メーカーによって占められるようになりました。現在、韓国内で販売されている電気釜は、CUCKOO、CUCHENの2社によりほぼ占められています。現在、1位のシェアを占めるCUCKOO

社の最新モデルは、1.2気圧程度で炊飯を行う日本製品とはことなり、1.8気圧での炊飯を行う高圧電気釜となっています。

ソウル市にあるModern Design Museumには、1960年代から80年代に韓国内で販売された多くの家電製品が展示されています。同館に展示された電気釜からは同年代における日本製電気釜のデザインの影響が強くみられます。下図に日本における電気釜の変遷と時間軸を合わせて、韓国の電気釜のデザインの変遷を示します。歴代の韓国製のモデルには日本製モデルのデザインの影響が強く見られる一方、CUCKOO社の2013年カタログに掲載された右側のモデルには、日本メーカーの製品とは異なるオリジナリティーの高いデザインが見られます。

韓国において、食のうち最も基本となるのは日本と同様ご飯で、古くからさまざまな穀物を混ぜて炊かれています。最も代表的なものは麦飯で、その他に粟飯・豌豆飯・小豆飯・黍飯・豆飯・唐黍飯など季節によって多様な雑穀飯が食べられてきました。これは古来からの「葉食同源」の実践でもあります。1990年代に開発された高圧電気釜は、韓国の伝統的なカマドの釜を再現する形で開発されました。伝統的なカマドの金属製の釜蓋は厚くて重く、内部圧力は大気圧以上となるため、雑穀米を美味しく炊く圧力釜そのものであるといえます。

以上から、韓国における電気釜のデザインは、それまで日本メーカーの影響を強く受けていたものが、高圧電気釜の開発により独自のデザインが導入され始めたことが考えられます。その背景として、伝統的に雑穀米を好む食文化や、生活文化の影響が考えられます。日韓の電気釜のデザインの変遷を、文化的な視点から見ること、両国における炊飯は、電気釜の登場以前より異なる文化として存在していたことが示されました。このことから、近年の両国の電気釜は、技術の進化により、地域の食文化に合わせた機能（炊飯）が実現したことで、異なる機能やデザインの製品が開発されるようになったと考えることができます。



日本と韓国における電気釜のデザインの変遷

(上段) 東芝カタログ、東芝科学館にて撮影 (下段左3点) Modern Design Museum Seoulにて撮影 (下段右2点) Cuckoo 商品カタログ2013

南浜名湖地域の活性化を目指した「うまいさかプロジェクト」の活動

米屋武文 (文化政策学科)

浜松市の舞阪町と湖西市の新居町にまたがる南浜名湖一帯は、東海道新幹線の車窓から眺める景色の中では最も美しいものの1つといわれている。筆者も新幹線に乗ってここを通るときには必ず目を見開いてその景色を楽しむことにしている。浜名湖は遠州灘からの海水と、流入する河川の水が複雑に混ざり合う汽水湖で、棲息する魚介類の種類の多さを誇っているが、アサリ漁が盛んなことでも有名である。アサリ漁の際にはツメタ貝という肉食性の巻貝と一緒に獲れる。ところが、このツメタ貝はアサリなどの二枚貝にとっては天敵である。潮干狩りに限らず、海辺に出かけた方は、小さな穴の空いたアサリの殻をご覧になった方も多いと思うが、アサリを捕まえると、やすりのような歯舌でアサリの殻頂部に2mm程度の穴を空けて中身を食べる。繁殖力が強く、時に大量発生すると潮干狩り会場を全滅させた事例もあるようである。

浜名湖でもツメタ貝による漁業被害は無視できない状況となっていることから、地元の漁協関係者が定期的に駆除を行なっているのが現状である。水揚げされたツメタ貝は、当地域では食用にする習慣がないため、そのほとんどが廃棄処分されている。

ツメタ貝は無毒な貝で、近いところでは、愛知県知多半島や三重県南部では塩揉みして生食したり煮付けて食されている。こうしたことから、舞阪町にある浜名漁協の女性グループ「浜名っ娘クラブ」ではツメタ貝を佃煮にして朝市などのイベントで販売しているが、その量は収穫されたツメタ貝全体からするとごくわずかである。

このツメタ貝を廃棄処分するのではなく、海の幸として有効活用し、風光明媚な南浜名湖のブランド品にまでブラッシュアップしようと立ち上げたのが、本学食文化研究会と浜名っ娘クラブおよび舞阪漁港周辺で活動する方々からなる「うまいさかプロジェクト」である。この活動の端緒となったのは、本学の昨年度の企画立案総合演習である。3年生が18クラスに分かれて地域の課題を取り上げて解決する方策を考案していくもので、各クラスとも概ね3つないし4つのグループに分かれて活動する。たまたま筆者の担当するクラスにおいてツメタ貝の可食化に向けたレシピを考案しようという企画を立てたグループが現れた。ツメッターという名の6名の学生グループは舞阪



ツメタ貝



ツメッター3料理

漁港に足を運んで取材する中で、浜名っ娘クラブや南浜名湖あそび隊という地域活性化に取り組む方々の協力を得て、3種類のツメタ貝の調理レシピを完成させ、昨年9月28日に舞阪協働センターで市民を対象にした公開試食会を行なった。

試食会でのツメタ貝料理は好評であったが、授業科目としての企画立案総合演習は前期で終了したことから、ツメタ貝普及活動を筆者のゼミを中心とした食文化研究会が引き継ぐかたちで「うまいさかプロジェクト」が発足した。

うまいさかプロジェクトは主として舞阪漁港で水揚げされる水産物を活用することで内外の人々の交流を促進し、地域をより元気にすることを目標に掲げ、まずはツメタ貝を地域ブランド創出のアイテムの1つとして位置付けることにした。

試食会を通じて食材としての普及への感触が掴めたツメタ貝の更なる活用の一手として、舞阪町に唯一存在する蒲鉾屋の株式会社魚秀と連携し、ツメタ貝をおでん種に加えることを考案した。ツメタ貝の串を一品に入れて試作したおでんも関係者の間で美味しいとの評価を得たことから、今年の2月22日に舞阪協働センターで「うまいさかおでん」と銘打って市民に公開の試食会を開催し、同様の好評を得ることが出来た。

以上の経緯で誕生した「うまいさかおでん」が舞阪発の商品として登場したのが、毎年5、6、7、8月の各月の第3土曜日開催の「えんばい朝市」である。

5月16日、6月20日の両日も50食分用意したが、いずれの日も販売開始30分で完売という盛況ぶりであった。

次の7、8月は暑い夏場のために、おでんとは別メニューにしたいとのメンバーの意見があり、前出のツメッターが考案したツメタ貝のから揚げと筆者の研究テーマでもある米粉を練り込んだシラスはんぺんを販売することにした。7月18日はあいにくの台風のために朝市は中止されたが、8月22日の朝市に出店の予定である。この原稿を書いているのは8月中旬であるが、準備は万端で、あとは好天を祈るのみといったところである。

県西部地域の観光資源としての魅力を有する南浜名湖一帯の更なる活性化をめざした「うまいさかプロジェクト」の活動はまだ始まったばかりであるが、今後の活動に期待いただくとともに叱咤激励をお願いする次第である。



うまいさかおでんの販売



うまいさかおでん種
左端がツメタ貝の串

公開講座紹介

(平成27年度前期公開講座)

追悼記念「榮久庵憲司とデザインの世界」を開講



シンポジウムの様子 (2015.7.4 講堂)

日本を代表するインダストリアルデザイナーで、静岡文化芸術大学の設立準備にも携われ、初代のデザイン学部長も務められた榮久庵憲司(エクスアン ケンジ)先生は、去る2015年2月8日に永眠されました。本年度

の前期公開講座では、生前の榮久庵先生の偉大な功績を偲び、またそのデザイナーとしての足跡を辿りながら、今、改めてデザインやものづくりの世界を考える機会として、「榮久庵憲司とデザインの世界」を全3日のシリーズとして開催しました。

第1日 2015年7月4日(土)

第1日は本学の熊倉功夫学長による講義「西洋のデザイン・日本の飾り」とシンポジウム「食文化と生活デザイン」を開催しました。前半の講義の中で熊倉学長は、榮久庵先生のデザインの根底にある「日本的なものの考え方」に言及し、その活動のベースとなった「運動」「事業」「学問」の展開を、柳宗悦(1889~1961)が推進した民藝運動と対比し、その類似性、共通性を指摘、また千利休の「茶の湯」は、建築、庭園、美術、工芸、思想・哲学などをトータルにデザインし、モノ、コトのデザインから人間そのもののあり方、心地よい環境の創造を追求しようとしたもので、それは榮久庵先生のデザインの世界にも通ずるものであると述べられました。

後半のシンポジウムでは、まずキッコーマン食品株式会社プロダクト・マネージャーの田嶋康正さんから、榮久庵先生のデザインで、1961年に発売された赤いキャップの「しょうゆ卓上びん」についてのプレゼンテーションがあり、発売以来54年間に4億5千万本を売り上げた“ロングセラー商品”に込められたデザインのコンセプトや、従来の「醤油差し」と比較しての画期性などが報告されました。次いで本学デザイン学科の佐井国夫教授が、缶コーヒーシリーズ「Café no Bar」のパッケージデザインについて報告、その後田嶋さん、佐井教授に熊倉学長、本学デザイン学科黒田宏治教授を交えてのシンポジウムに移り、戦後の食文化や生活スタイルの移り変わりについて、モノづくりやデザインの視点から熱心な議論が展開されました。

第2日 2015年7月11日(土)

第2日は伊坂正人名誉教授による「もの文化のデザイン」、およ



シンポジウム会場のロビー展示 (2015.7.4 講堂)

び本学デザイン学科磯村克郎教授による「道具から空間へ〜インダストリアルデザインとパブリックデザイン」の2つの講義が行われました。伊坂名誉教授は人類が生み出した「もの文化」について、「人類の歴史とも」「物質文化」から説き起こし、人間の生活と道具、産業革命と近代デザインのはじまり、デザインの経済的、社会的、さらには文化的価値などについて言及されました。

また磯村教授はインダストリアルデザインの領域で大きな功績を残した榮久庵先生とGKグループ(GK/ジイ・ケイ・インダストリアルデザイン研究所 1957設立)が、空間、環境デザインの領域においても、戦後早い時期から様々な提案を行っており、赤い屋根の電話ボックス(1953年)や大阪万博(1970年)のストリートファニチャー(サイン、照明、ベンチ、トイレ、電話ボックス、ごみ箱など)などで具体的に実現したこと、その後も本学が立地する浜松の区画整理地区のサインや浜松駅北口駅前広場、広島市の平和大通りなど、国内の多くの都市でそのデザイン提案が実現している事例を紹介されました。

3. 2015年7月18日(土)

第3日は高梨廣孝さん(元本学デザイン学部教授)による「浜松とデザイン」、佐井国夫教授による「日中デザイン文化交流を振り返る」の2つの講義が行われました。高梨さんは榮久庵先生と浜松に本社を置く日本楽器製造(現・ヤマハ)との関わりの経緯を語られ、戦後に日本楽器製造の社長となった川上源一氏がGKにピアノのデザインを依頼したこと、その後、日本楽器製造がオートバイ生産に進出した際にも、オートバイのデザインをやはりGKに依頼し、当時は黒が主流だったオートバイの色を、陸を駆ける駿馬をイメージした“栗毛色”にするなど、デザインの独自性を強く打ち出したことなどが紹介されました。また「日本的発想の原点を探り、日本のアイデンティティを求めよう」として、榮久庵先生のデザインの世界を総括されました。



講義中の佐井国夫教授 (2015.7.18 176大講義室)

今シリーズ最後となった佐井教授の講義では、榮久庵先生と中国とのデザインを通じた文化交流の活動が紹介され、家電メーカーHaier(ハイアール)社の幹部が、1991年に中国で行われた榮久庵先生の講演を聴講したことをきっかけに、榮久庵先生およびGKと

同社とのデザイン交流が始まったこと、1984年に中国山東省青島で創業したHaier社が世界のトップブランドとなる過程で、榮久庵先生・GKのデザインが大きく貢献したことなどが紹介されました。2010年に開催された上海万博でも環境デザインをGKが担当するなど、中国でも大きな仕事をされた榮久庵先生は、中国とのデザイン交流について「鑑真和上千年の恩顧に応える」という言葉を残しておられます。奈良時代、苦難の末に来日し、日本国内の仏教の普及、発展に大きな貢献をした鑑真和上の恩に報いる気持ちで、改革開放後の中国のデザイン発展に尽力された功績は誠に大きなものがある、そう指摘された佐井教授は「偉大なデザイナーと出会ったことを幸せに思う」と榮久庵先生を偲び、今回の公開講座を締め括られました。

(文責：地域連携室 富田晋司)

メディアに関する複合的イベント 「メディアデザインウィーク」のご紹介

的場ひろし (デザイン学科)

○概要

「メディアデザインウィーク」は、毎年2月上旬のおよそ一週間、本学で行われる参加費無料の市民開放型のイベントです。本イベントは、2001年に始まった「メディアアートフェスティバル」がその前身（メディアアートフェスティバルに関しては、過去の「文化と芸術」〈Vo.9、11など〉に長嶋洋一教授による開催報告が掲載されています）で、2013年より「メディアデザインウィーク」として開催して今年で3年目になります。メディアデザインウィークでは、メディアアートフェスティバルの目的であった「メディアアートの啓蒙と作品発表の場の提供」を受け継ぎつつ、「メディア」に関係するより広範なデザインとアートを対象としています。

メディアデザインウィークは、「学生作品の展示」「講演」「ワークショップ」の3つの要素を柱として運営しています。これらの3つの要素の複合的かつ集中的な体験によって、メディアデザインに対する一層の興味を喚起でき、知見をもたらすことができると考えています。本学の学生や教職員だけでなく、本学の立地する地域の市民の方にも参加していただき、本学の活動に対する理解を深めていただくことも重要な目的です。

以下に、本イベントの3つの要素について詳細を説明します。

○作品展示



学生作品展示

作品展示では、基本的にメディア造形学科及び他大学の3年生（および大学院1年生）の作品が対象となります。3年生は、デザイン能力の完成に至る途上の段階と位置付けられますが、この時期に作品に対する客観的な意見をj得ることで、残りの在学期間における制作をより充実させることができると考えられます。4年生には卒業研究制作展で作品を発表する機会が与えられますが、これまで3年生には作品を対外的に発表する本格的な機会がありませんでした。そこで、メディア造形学科の学生が、自ら選ぶテーマに基づいて半年間の制作を行う3年次の必修科目「メディア造形総合演習Ⅰ」の成果の一部を、成績評価の後に、本学のギャラリーと文化・芸術研究センターをメイン会場として「作品展示」として一般向けに公開しています。今年の展示では、グラフィック作品、映像作品、インタラクティブな体験型作品等、約20点の作品が出展されました。

また、地方都市に位置する本学は、メディアデザインに関して同様の活動を行う他の教育機関との交流が充分に行われていたとは必ずしも言えない状況にありました。異なる大学の学生同士が互いの制作内容を評価しあうことにより、新たな刺激や知見を得ることができ、さらには切磋琢磨の機運を醸成することができると考えられます。メディアデザインウィークでは、本学のメディア造形学科と近い内容の研究教育活動を行う複数

の大学と連携し、それらの大学から選ばれた学生作品の展示と、大学教員同士で相互に作品を講評する機会を作っています。今年のメディアデザインウィークでは、札幌市立大学、筑波大学、東北工業大学、東北芸術工科大学、中京大学、同志社女子大学の六大学から参加いただき、それぞれの大学の特色ある作品が並びました。

○講演



講演会

メディアデザインウィークでは、メディアに関係する多様な分野から専門家を招き、講演や展示作品の講評をお願いしています。これまでの3年間に、知覚心理学の分野から北岡明佳さん、下條信輔さん、グラフィックデザインの分野から北川一成さん、映画女優の香川京子さん、アニメ監督の増井壮一さん、ジャズギタリストの矢堀孝一さん、アートディレクターの鹿野護さん、小杉幸一さん等の方々をお招きしました。なお、今年は香川京子さんの講演に合わせて、香川さんにとって思い出深い主演作である山本薩男監督作品「赤い陣羽織」（1958年）の35mmフィルムによる上映を行いました。いずれの講演においても、通常の授業では網羅できないような専門的な話題についてわかりやすくお話をしていただきました。

○ワークショップ



ワークショップ

ワークショップは本イベントにおける重要な要素の一つであり、メディアに関する新しい技術に興味のある、学生、教職員、一般市民の方々を対象として、メディアアートフェスティバルとして開催していた時代から、長嶋洋一教授を中心として続けられてきました。今年のメディアデザインウィークでは、思いついた機能を手早く実現するために、ハードウェアを簡易的に構築できるスキッチングと呼ばれる技法について、レクチャーと実際の制作体験を通して学ぶワークショップが開催されました（なお、今年は外部講師の都合等のために、メディアデザインウィークの会期に先だつ2014年11月に行われました）。2日間の日程でのべ36名が参加し、グループによる制作作業等に取り組みました。

○まとめ

メディアデザインウィークはこれまでの3年間で、多くの学生、教職員、市民の方に参加していただき、メディアに関する興味と知見を深める場として機能してきました。現代のデザインにおいて、メディアはますます重要な位置づけとなっていくと考えられます。今後もメディアデザインウィークを意義深いイベントとしていくために、皆様のご協力をいただければ幸いです。

活動紹介

龍山調査と現地報告会 ～2014年度「文化政策学科・船戸ゼミ」の活動～

船戸修一（文化政策学科）

1. 船戸ゼミの内容

船戸ゼミは「地域社会学」を専門とし、地域、とりわけ「中山間地域」について学んでいます。また、その現状を把握するための方法として「社会調査」や「フィールドワーク」についても学んでいます。そのうえで、ゼミでは、実際に浜松の中山間地域に足を運び、「聞き取り調査」や「アンケート調査」の実施を通じて、現地の実情や課題を明らかにすることを目指しています。さらに、このような知見をもとに地域の人たちの前で、課題解決策を発表し、今後の地域づくりを共に構想することに努めています。

2. 龍山調査の実施

龍山地域での聞き取り調査の様子
(2014年6月1日)

2014年度は、浜松市天竜区龍山地域（旧・磐田郡龍山村）を1年間かけて調査を行いました。そもそも、この地域は、浜松市と合併するまで、県内に残る「最後の村」でした。かつては秋葉ダムの建設や峰之沢鉱山の開発などで、ピーク時の人口は1万3千人を超えていましたが、2014年時点の人口は8百人弱です。2014年3月末には、龍山第一小学校が閉校し、町内からは

小中学校がなくなりました。今後、さらなる人口減少や集落の消滅など過疎問題が深刻化することが予想されます。このような地域において、船戸ゼミでは、龍山にある全34集落を訪ね歩きつつ、そこにお住まいの方々への聞き取りを行い、集落の現状や課題について調査してきました。また、龍山のイベントやお祭りに参加することを通して現地の生活や暮らしについてもフィールドワークを行って来ました。さらに、龍山にお住まいの349全世帯にアンケートを配布し、現地の人たちの意識調査を行いました。そして、すでに龍山から転出された、現在20代から70代までの龍山出身者約600名にも、アンケートを配布し、ふるさとである龍山への思いや現在の龍山とのかかわりについても調査をしました。

3. 現地報告会の開催

以上のような調査を踏まえ、2015年2月27日（金）の夜（午後7時～10時）、龍山森林文化会館で現地報告会を開催しました。その内容は、以下の通りです（学生の学年は報告会当時）。

- ①はじめに：調査の経緯と調査報告会の概要／
船戸修一（文化政策学科教員）
- ②ふるさとに通う龍山出身者と集落のかかわり／
石倉達也（文化政策学科3年）・堀絵莉華（文化政策学科2年）
- ③農村女性たちによる地域活動の意義と課題／
中込恭輔（文化政策学科3年）
- ④移住者の意識と定住促進のための課題／
山下貴帆（文化政策学科3年）
- ⑤買い物支援の現状と将来像／
山本尚徳（文化政策学科2年）
- ⑥空き家の現状とその利活用の課題／
船戸修一（文化政策学科教員）
- ⑦おわりに：今後の龍山の地域づくりに向けて／
船戸修一（文化政策学科教員）

石倉達也君と堀絵莉華さんは、龍山地域から転居した「龍山出身者」が親の様子を見に来たり、集落の祭りに参加したりするなど足繁く実家に通っている事実を明らかにし、集落を越えた「人間（家族）関係」が構築されていれば、そう簡単に集落は消滅しないことを説明しました。「限界集落」の概念に代表されるように集落の存続可能性を単なる人口

比率で考えるのではなく、人間関係から捉える重要性を強調しました。

中込恭輔君は、龍山の女性たちが自主的に集まって取り組んでいる「農産物加工グループ」の調査から、その活動の意義と課題を明らかにしました。そして龍山地域に住む男性が農産物の集荷や販売などを支援することによって彼女たちの負担を軽減させ、地域一体となった活動体制を構築していく必要性を強調しました。

山本尚徳君は、自家用車がないため買い物が困難な高齢者を対象として実施されている地元商店による「移動販売」の取り組み内容と課題を明らかにしました。現在、この取り組みは赤字事業となっているため、移動販売の際に野菜を集荷し、それを農産物加工グループに販売するなど、少しでも利益を上げていく必要性を強調しました。

山下さんは、龍山地域外から転入してきた「移住者」への聞き取り調査から移住者の意識や考えを明らかにし、このような人たちが地域にもたらす効果や移住生活の課題を説明しました。そして、移住者が来るのを待つだけではなく、集落で希望する移住者を募集・指名するなど、集落で自主的に主体的に移住者を迎え入れていく必要性を強調しました。

以上のような現地報告会には、龍山以外に住んでいる方々も含め150名が参加しました。また、会場からは個々の発表に対する質問が積極的に出され、地域住民の人たちと今後の地域づくりについて活発な議論ができました。

4. 今年度の船戸ゼミの活動

今年度は、5月中旬から天竜区佐久間地域（旧・磐田郡佐久間町）を調査しています。そもそも、旧・佐久間町は、磐田郡山香村・城西村・佐久間村・浦川町が1956（昭和31）年に合併して誕生しました。この町は、かつては佐久間ダムの建設や久根鉱山の開発などで、ピーク時の人口は2万6千人を超えていましたが、2012年時点で4千5百人弱です。ここも龍山地域と同様、人口減少や集落の消滅など過疎問題がより顕在化していくことが予想されます。船戸ゼミでは、今年度は「山香・城西地区」の調査を行い、来年度は「佐久間地区」、再来年度は「浦川地区」の調査を行い、3年間かけて佐久間地域全体の調査を行う予定です。さらに、今年度からは、自治会単位ではなく、自治会の下部組織である「組」や「班」単位で聞き取り調査を行っています。中山間地域では、標高の高低差、国道へのアクセス時間など、地理的条件が違えば、同じ自治会であっても、意識や考え方に相違が見られます。そこで「組」や「班」単位で調査を行った方が、より細かい地域住民の声を拾うことができると思っています。11月末までに、このような聞き取り調査を終え、12月には全戸を対象にしたアンケート調査を行う予定です。そして来年2月には、龍山調査と同様、佐久間（山香・城西地区）調査の現地報告会を開催したいと考えています。

以上のように、今後も、船戸ゼミでは、浜松の中山間地域に足繁く通うことによって、そこに住む人たちと「信頼関係」を構築し、そのうえで社会調査やフィールドワークによって中山間地域にしかない「現場の知」を紡ぎあげ、そこから地域づくりを現地の人たちと共に構想していきたいと考えています。

龍山調査・現地報告会の様子
(2015年2月27日)佐久間地域での聞き取り調査の様子
(2015年5月24日)

2014年度 研究事業等一覧

<特別研究>

特別研究は毎年、学内公募に応じて教員が研究テーマを申請、学内の審査を経て採択を決定します。研究の期間は1年または数年に及び、テーマによっては専門分野の異なる教員、その他の研究者が共同で研究を行うこともあります。特別研究の研究成果は本学の研究紀要や研究成果発表会、学会での発表等を通じて広く情報発信するとともに社会へ還元しています。

No.	研究名	代表者		目的及び内容（特別研究申請書より）
		学科	氏名	
1	生活文化の形成における家事家電製品のデザインと広告の変遷	生産造形	伊豆 裕一	我が国における炊飯器のデザインと広告の変遷を調査し、それらが生活文化形成に果たした役割を明らかにする。つぎに、日韓における米食文化と炊飯器の関係を比較し、関連産業への提言へとつなげる。(2015年2月9日に食文化シンポジウム「食文化と電気釜」開催)
2	専門科目への英語教育導入に関する研究	生産造形	高山 靖子	静岡文化芸術大学の専門科目に対して英語教育を導入することにより、実践的な英語教育プログラムの確立を目指し、SUACの国際人教育の充実を図るとともに、国際人育成機関として対外的なイメージアピールを狙う。そのための学習プログラムと学習ツール（教科書）を作成する。
3	文化芸術による地域資源発信事業の研究（その2）	生産造形	磯村 克郎	多岐にわたる地域住民の民芸活動と芸術文化が連携した地域資源の発信・発展プロジェクトの実施を通して、芸術文化の他分野への波及力と現場でのマネジメント、デザイン人材育成の可能性を検証する。
4	浜松市の中山間地域における空き家の利活用をめぐる社会的研究：天竜区龍山町（旧龍山村）を事例として	文化政策	船戸 修一	浜松市の中山間地域では空き家が増加し、深刻な問題になっている。一方、現地への移住希望者は空き家利用を望んでいるが、現実には進んでいない。そこで空き家所有者と移住希望者のミスマッチの背景を明らかにする。(2015年2月27日に龍山森林文化会館にて「龍山調査報告会」を開催)
5	人口減少時代における地域のあり方を考える	文化政策	森 俊太	人口が減少し、高齢化率が高まる時代における地域の政策課題を社会学、都市計画、行政、農業・食品、経済、教育・福祉、図書館の視点から取り上げ、これからの地域のあり方を考える。
6	戦後日本における放送と地域農業の関係性をめぐる考察	文化政策	加藤 裕治	戦後日本において、NHKと地域農業関係者との間にあった特殊制度（地域の農業普及委員や生活改善普及員が中心となり放送に関わったRFD通信員制度）の詳細を調査する。それにより、放送と地域農業の関係を明らかにし、今後の放送と地域の関わりの可能性を探る。
7	浜名湖水都構想における環境設計手法の提唱	空間造形	中野 民雄	浜名湖におけるサステイナブルな地域環境の形成を目指した、郊外型水都モデルとコミュニティ・観光の体験型スローリズムを総合的にデザインする環境設計手法を提唱することを目的とする。
8	新しい価値を提供する次世代型ユニバーサルデザインの研究	生産造形	谷川 憲司	UDに関わる研究・開発ならびに情報発信を行い、特に地域におけるUDの推進に寄与する。本学独自のUDとして「マイナス面をなくす改善」に加え「新しい価値の提供」を志向する次世代型UDの考え方を研究する。
9	多文化共生分野の地域課題解決に向けた実践的研究	国際文化	池上 重弘	本学に在籍する外国人学生らの経験や本学のこれまでの研究成果の蓄積等、本学の有するリソースを活用した実践的な研究を進め、静岡県や浜松市、磐田市等から要請のある多文化共生分野の地域課題の解決を図る。
10	アーネスト・ゲルナーの思想・哲学とナショナリズム論の基礎研究	国際文化	馬場 孝	アーネスト・ゲルナーの思想・哲学の全容の解明と、彼のナショナリズム論の批判的継承を研究目的とする。多文化共生社会の可能性を考察する上でのゲルナー理論の持つインプリケーションも研究の視野に収めていきたい。
11	現代演劇上演におけるシュルレアリスムのインパクトと意義	国際文化	石川 清子	20世紀の前衛芸術シュルレアリスムが残したものは大きく、我々の日常生活にまで浸透している。現在、この運動にどのような意義が見出せるのか。フランスの一演劇集団のイベントを通してそのあり方を探求する。

No.	研究名	代表者		目的及び内容（特別研究申請書より）
		学科	氏名	
12	ユニバーサルデザイン講義録・演習記録資料化研究	生産造形	永山 広樹	本学開講ユニバーサルデザイン講義・実習の記録編さんを研究の目的とする。 平成26年度は、平成25年度の講義・演習記録編集整理に引き続き、原稿作成と編集等を実施することにより、当初目的の本学ユニバーサルデザインの確立を目指す。併せて、書籍化へ向けた調整等を実施する。さらに、新たにユニバーサルデザイン講義教育効果の検証調査を加え、記録編さんの資料とする。
13	デザイナー育成のためのスケッチングツールの開発研究	メディア造形	長嶋 洋一	発展的なデザイン領域として、インタラクション（システム）までをデザインできるような、「スケッチング」という新しいデザイン手法のための教育ツール（ハードウェア、ソフトウェア、テキスト）を研究開発する。
14	デザイン学部におけるインタラクションデザイン研究・教育のあり方	メディア造形	的場ひろし	主にメディア造形学科内で行われているユーザインタフェース、インタラクション系の研究・教育が扱う対象を、27年度からの学部再編に向けて、本学部全体に関わる領域に拡張し、学部としてふさわしい研究・教育のあり方について方向性を見出す。
15	「発達障害者のための自動車運転支援デジタル教材の検討（第一次）」	メディア造形	宮田 圭介	発達障害者は法律上、自動車運転免許取得に問題はなく、大多数は運転技能も問題ないが、障害のために認知判断の難しい運転状況があるので、安全運転できるように判断能力を支援するデジタル教材のデザインを行う。
16	パリにおける日本の対外文化政策—自治体の出先機関に注目して— (研究主題：わが国の対外文化施設の現状と課題—パリの自治体海外事務所を中心に—)	芸術文化	松本 茂章	自治体の対外政策や自治体外交に注目する。どのような活動が行われ、いかなる意義があるのか?自治体対外政策の現状と課題を解明したい。
17	紙とデザインのいままで、これから② 製紙産業とパッケージデザインをめぐる基礎研究（近現代史概略）	生産造形	佐井 国夫	ネット社会の進展によるビジュアルデザインの脱・紙化（非印刷媒体化）、環境問題との兼ね合いの中でのパッケージの簡素化（省資源化）など、紙媒体のあり方についての検討が求められている。 本研究は、静岡県の特徴ある地場産業分野である紙とデザインの関わりに焦点をあて、両者に関連する近現代の足跡を概観するとともに、これからの紙デザイン文化の展開に資することを目的とする。
18	地方都市におけるトランジットモールのデザイン—広島市平和大通りプロジェクトをモデルケースとして	生産造形	山本 一樹	広島市の平和通りのデザインプロジェクトを題材とし、まちづくり/街路/LRT/道路構造などが融合した構想を再評価し、現在に対応したデザイン検討により、地域と公共のデザインの知見を得るものである。
19	Design for Manufacturing (DFM) に関する研究	メディア造形	望月 達也	3D-CADデータを中核とするモノづくりを提案し、デザインから製造までのデジタルモノづくりを推奨してきた。DFMはその最終段階でデザインをものづくりの立場から検証し、ものづくりを考えたデザインを実現することにある。
20	浜松の民芸運動の事業構造に関する基礎的研究	生産造形	黒田 宏治	浜松地域における民芸運動の展開やシステムの探求を進め、浜松・民芸運動（昭和前期）の事業構造の特徴や弱点を明らかにする。
21	我が国の芸術団体・文化施設等の経営改善と公共政策のあり方	芸術文化	片山 泰輔	芸術経営統計のデータ及び、文化庁補助事業の実施を通じて得られる各団体のミクロ情報をもとに、我が国の芸術団体・文化施設等の経営状況及びそれに対する国や地方自治体の公共政策のあり方を検討する。

<イベント・シンポジウム>

地域への情報発信、地域貢献などを目的に本学主催によるイベント、シンポジウム等を開催しています。学内公募に応じて教員が申請、学内の審査を経て採択を決定します。イベント等の企画・運営は担当の教員が中心となっており、多くのプロジェクトに本学学生が企画、運営のスタッフまたは参加者として加わっています。

No.	イベント名	代表者		目的及び内容（イベント事業申請書より）
		学科	氏名	
1	めばえの親子スポーツ（じゅうどう）教室	国際文化	溝口 紀子	本イベントは護身目的だけでなく礼節や徳育といった教育プログラムとして浜松市民に支持を得られている。今回のめばえのじゅうどう教室は幼児を対象に「遊び」の要素を取り入れたバランス、調整力を促す柔道初心者のための導入教育指導プログラムを展開する。（2014年11月2日 於：浜松市武道館 講師：溝口紀子 特別講師：北田典子・全日本柔道連盟理事）
2	So-Co会議 in Hamamatsu ～SocialでEcoなビジネスが持続的な社会をつくる～	国際文化	下澤 嶽	静岡地域でソーシャルビジネス、または良心的なビジネスを実施している事例を紹介し、関心のある県民と関係者たちが学び、交流する場をつくる。またこれまで当該申請者の研究成果の総決算の場として浜松地域に「良心ビジネス」と「ビジネスにたけたNPO」の可能性を訴えていく。
3	フェスタ・ジュニーナ em SUAC	国際文化	池上 重弘	浜松在住のブラジル人の子どもたちを紹介してフェスタ・ジュニーナ（6月のまつり）を本学で開催し、本学学生のブラジル文化に対する理解を深めるとともに、子どもたちが将来の進路先として大学に親しむ契機とする。（2014年7月12日）
4	放鷹文化講演会「家康公と田中城 鷹狩りの道」	国際文化	二本松康宏	①放鷹術実演 於：藤枝市立西益津中学校グラウンド ②公開講演会「鷹狩りの文化史 二本松康宏」「徳川家康公の鷹狩りと駿河田中城 岡崎寛徳（大倉精神文化研究所） 於：藤枝市立南図書館」（2015年2月7日）
5	第16回絵本学会大会 及びユニバーサルデザイン絵本コンクール2014	文化政策	林 左和子	身体的、知的特性や年齢文化などを越えて、いろいろな人が一緒に楽しむことのできるUD絵本コンクール及び応募作品の展示を行う。またUD特別研究と連動し、UD絵本をテーマにしたワークショップを開催する。（作品展示会 2014年11月8日～16日）
6	講座 読書の質の向上と学校図書館（仮題）	文化政策	林 左和子	「静岡県子ども読書活動推進計画第二次中期計画」の内容について周知しそこで示されている目標の実現に向けた活動の促進を図る。
7	静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2014	芸術文化	梅田 英春	①「北インド音楽を紡ぐ・伝統楽器サロードとタブラの共演 サロード：デイヴィッド・タラソフ タブラ：ユザーン 解説：田森雅一」（2014年5月24日） ②「楽しいチン！どん！～ジャパン・カーニバル 東京チンドン倶楽部」（2014年7月16日） ③「バンバン！ケンパン♪はままつ2014 亀井博子（マリンバ） 長坂憲道（アコーディオン）ほか」 ④「スイーツコンサート Tommy CHO（ジャズ鍵盤ハーモニカ）」（2014年12月5日）
8	静岡県舞台芸術センター（SPAC）との連携による現代劇公演	芸術文化	梅若 猶彦	三島由紀夫 近代能楽集「綾の鼓」（2014年10月2日）
9	オペラ「ラ・ボエム」上演	芸術文化	高田 和文	平成25年度の「カヴァレリア・ルスティカーナ」に続き「クオーレドオペラ」の制作によるオペラ「ラ・ボエム」を本学講堂で上演し、本学学生及び地域の市民に本格的なイタリアオペラ鑑賞をする機会を提供する。（2014年9月4日）
10	UD+in Hamamatsu（ユニバーサルデザイン・プラスin浜松）2014	生産造形	谷川 憲司	UDについて関心が高まる一方で、市民の関心が低い実態がある。産学官連携によって、魅力の付加価値をプラスした先進のUD+（プラス）の製品サービスを紹介するイベントを実施し、ユニバーサルデザインの魅力と楽しさを発信する。（2014年8月21日）「誰もが快適に使えるUDな乗り物 パーソナルモビリティ 展示会 於：浜松市ギャラリーモール・ソラモ」（2014年8月24日）
11	SUACデザインウィーク	メディア造形	的場ひろし	今年度実施のメディアデザインウィークの実績に基づき、大学間の交流と、相互啓発を特徴とする成果発表会を開催する。（2015年2月1日～8日）
12	イブニングレクチャー2014	空間造形	中山 定雄	浜松発のデザインムーブメントの発信、大学のプルゼンスのアピール、市民と学生の交流をクリエイティブし、就職などにつなげる。業界のトップランナーが東京などでイベント後に、大学をPRしてくれる事も期待できる。 ①中西哲生（スポーツジャーナリスト）2015年1月9日 ②原研哉（デザイナー）2015年1月27日

No.	イベント名	代表者		目的及び内容（イベント事業申請書より）
		学科	氏名	
13	TDW （東京デザイナーズウィーク） 2014学生展	空間造形	中山 定雄	本年が4年目の参加である。 学生が大学の看板を背負い、全国レベルのデザインに触れ、自分たちのデザインを発表し、他校やプロと交流を広げる。全国の有名芸大・美大、約50校が参加し、それぞれの分野で講習会や採点が行われ、評価される（2014年10月25日～11月3日）。またTDW終了後は大学において展示会を行う。

<地域貢献・連携事業>

本学の教育・研究の成果を公開講座やフォーラム等の開催を通じて情報発信するとともに、地域社会へ還元しています。

No.	イベント・事業名	内 容
1	特別公開講座「薪能」（2013年10月8日、9日）	第一夜 能講座 泉嘉夫（観世流能楽師）、熊倉功夫（学長） 第二夜 薪能「海土」 シテ：梅若猶彦（芸術文化学科）
2	前期公開講座「和食の世界」 （2014年6月21日～7月19日・全5回）	第1回：世界無形文化遺産となった和食（熊倉功夫/学長） 第2回：和食とユニバーサルデザイン（小浜朋子/空間造形学科） 第3回：日本史と食文化（磯田道史/国際文化学科） 第4回：家庭の和食（後藤加寿子/外部招聘） 第5回：日本食文化の変遷と今後の展望（米屋武文/文化政策学科）
3	後期公開講座 「創造都市 ボローニャの魅力を探る」 （2014年12月6日・12月20日・全2回）	第1回：①「ものづくり」都市 ボローニャの秘密（根本敏行/文化政策学科） ②「絵本のまち ブックフェアとIBBY（林左和子/文化政策学科） 第2回：①17世紀ローマとボローニャ派の画家たち（小針由紀隆/芸術文化学科） ②大学都市ボローニャの歴史と現在（武田好/国際文化学科） ③ボローニャの文化と文化政策（高田和文/芸術文化学科）
4	夏季手作り公開工房（2014年8月30～31日）	①石膏デッサンを描いてみよう（山本一樹/生産造形学科） ②銅版画を制作しよう（佐藤聖徳/メディア造形学科） ③揺れる彫刻 モビール（峯郁郎/生産造形学科） ④テキスタイル 手織りに挑戦！（種村興治、桑原壽子/外部招聘）
5	春季手作り公開工房（2015年3月21～22日）	①石膏デッサンを描いてみよう（山本一樹/生産造形学科） ②銅版画を制作しよう（佐藤聖徳/メディア造形学科） ③テキスタイル 手織りに挑戦！（種村興治、桑原壽子/外部招聘）
6	文化芸術セミナー 「浜松 楽器の事典 ピアノ編」 （2014年6月6日、7月11日、10月17日、11月14日、12月17日）	ピアノ演奏：石井園子 エディター：富田晋司（地域連携室） 第1章「浜松のピアノ産業」（四方田雅史/文化政策学科）・作品演奏：スカララッティ、バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなど 第2章「ピアノを作るⅠ」（峯郁郎/生産造形学科）・作品演奏：シューベルト、ショパン、シューマンなど 第3章「ピアノを作るⅡ」（峯郁郎/生産造形学科）・作品演奏：シューベルト、ショパン、シューマンなど 第4章「ピアノ調律と調律師」（杉森重夫/外部招聘）・作品演奏：フォーレ、ドビュッシー、ラベルなど 第5章「楽器産業と創造都市」（根本敏行/文化政策学科）・作品演奏：スクリャーピン、ラフマニノフ、プロコフィエフ、滝廉太郎、佐藤敏直、坂本龍一など
7	特別講演「生きる力」（2014年11月1日）	講演：佐藤優（招聘客員教授） 座談会：佐藤優、熊倉功夫（学長）、磯田道史（国際文化学科）

<出版助成>

本学教員が学術研究の成果を公開するための出版について、学内公募により助成しています。

	著 者	内 容
1	監修 熊倉功夫（学長） 編集 米屋武文（文化政策学科）	『農の6次産業化と地域振興』 春風社 2015年3月

<本学における学会開催>

	名 称	本学担当者
1	2014年度 道具学研究発表フォーラム （2014年1月31日～2月1日）	峯郁郎（生産造形学科）

○第15回 静岡文化芸術大学特別公開講座 新能

第一夜 能講座 10月7日(水) 18時30分開演 静岡文化芸術大学講堂
講師 熊倉功夫(学長)、北澤秀太(能面師)

受講料：入場無料(事前申込不要)

第二夜 新能 10月8日(木) 18時開演 静岡文化芸術大学出合いの広場(雨天時は講堂)
狂言 和泉流 一番 井上松次郎 ほか
能 観世流「頼政」梅若猶彦 ほか

受講料：3,000円(全席自由 高校生以下無料)

※チケットはアクトシティ浜松チケットセンター、チケットぴあにて購入可

○静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2015

I. 風と川と音と～龍山に響くパイプオルガンコンサート

10月17日(土) 14時開演 龍山森林文化会館(浜松市天竜区龍山町瀬尻)

演奏 新山恵理 解説 上山典子(芸術文化学科)

入場無料(要予約 Mail: acrc@suac.ac.jp FAX: 053-457-6123)

II. バンバン!ケンバン!はままつ2015

11月14日(土) 静岡文化芸術大学

①二つのチェンバロによるトーク&コンサート「古楽器」における電子楽器の可能性

14時開演 静岡文化芸術大学自由創造工房

チェンバロ演奏 水永牧子

トーク 岩上 勝(三創楽器製作所)、刀祢雅広(ローランド)

②ピアノ・レクチャー・コンサート 音と沈黙のはざままで～サティがきこえる風景

16時30分開演 静岡文化芸術大学講堂

ピアノ演奏 河合珠江 レクチャー 竹内 直

一般1,000円(1枚で2公演鑑賞できます。チケットはアクトシティ浜松チケットセンターにて購入可)

学生無料(要事前申込 Mail: acrc@suac.ac.jp FAX: 053-457-6123)

○シンポジウム 浜松で考える多文化共生のフロンティア

10月17日(土) 13時～17時30分 静岡文化芸術大学 南280中講義室

駒井 洋(筑波大学名誉教授)、山脇啓造(明治大学)、池上重弘(国際文化学科) ほか

入場無料(事前申込不要)

○イタリア伝統の仮面即興劇 コンメディア・デッラルテ

10月23日(金) 18時30分開演 静岡文化芸術大学講堂

出演 フラテルナル劇団

入場無料(事前申込不要)

○静岡文化芸術大学 研究成果発表会

11月12日(木) 15時30分～18時 南281中講義室

高校生以上

入場無料(事前申込不要)

○文化芸術セミナー 浜松 楽器の事典 ピアノ特別篇

シンポジウム「音楽コンクールと音楽文化」(ピアノ演奏とトーク・セッション)

11月13日(金) 18時20分開演 静岡文化芸術大学講堂

平野 昭(本学名誉教授)、上野優子(ピアニスト)、小岩信治(一橋大学)

入場無料(事前申込不要)

編集後記

2020年の東京オリンピック・パラリンピックまであと5年、メインスタジアムとなる新しい国立競技場や大会のエンブレムなど、この夏は「デザイン」に関わる話題が豊富でした。7月に開催された本学の前期公開講座のテーマも「榮久庵憲司とデザインの世界」。偉大なデザイナーであり、本学の生みの親の一人でもある榮久庵先生の世界はやはり奥深く、素晴らしいものだったのだと、思いを新たにしました。半世紀を超えてなお輝き続ける“赤いキャップの卓上しょうゆびん”、人々の無意識レベルにまで深く浸透し、余計な主張をすることもなく、黙々と役割を果たし続ける、歴史に残るデザインとはかくあるものかと。(St.)

Art & Culture

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.22

October 2015

発行人：高田和文 編集人：富田晋司
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

